

CONTENTS

2011年度
を振り返って

- 来年度の展望..... 1
- 今年度の研究を振り返って..... 2
- 学習紹介：ならびっこキックベースボール..... 3
- 学習紹介：ハ長調の音階による16小節の旋律づくり..... 4
- 学習紹介：単元をつらぬく言語活動の設定により、主体的な読みを促す..... 5
- 学習紹介：可視化することにより交流する..... 6
- 学習紹介：「ひと・もの・こと」との出会いが大切..... 7
- 学習紹介：聞き合う子どもたちがつくる協同的な学び..... 8

来年度の展望



和歌山大学教育学部附属小学校 副校長 沖 香寿美

手応え

平成23年度も締めくくりの時期を迎えました。

私たちは、5年間「質の高い学びを創る」ことを大前提に、授業改革に取り組んできました。

まず、授業環境の改善に始まり、情報教育環境の整備、プロジェクト型学習などのカリキュラム開発、ペア学習やグループ学習など学習形態の工夫、ワークショップ型授業研究会の工夫等々、どこの学校でも取り入れが可能なことは、できる限り実行してきました。

教員は、若手もベテランも同じ土俵に立って、どのような場面でどのような学びが成立したのか、逆に成立しなかったのかなど、子どもの学びを中心に据え、協議を進めてきたのです。その話し合いが自分たちだけの世界で終わらせないために、外部から講師を招聘したり、協力校の先生方に参加していただいたりして、オープンな協議を行ってまいりました。

東京大学大学院教授の秋田喜代美先生には、3年間にわたり、研究発表会だけでなく、校内研修会でもご指導いただきました。「育ちが見える学校・先生の取り組みが見える学校」になってきたという先生のお言葉は、教員のやる気と自信につながったことは言うまでもありません。まさに本校の研究テーマである「学びの質の高まり」を感じているところです。

附属小学校の使命

附属小学校には、地域教育への拠点校になるという使命があります。今年度も、県内外の先生方のご協力、ご支援のおかげで校内授業研究会、複式教育研究会、夏季教科領域等研修会、教育研究発表会など多くの授業研究会を開催することができました。その際に、ご参会のみなさまから貴重なご意見ご感想をいただいたことは、教職員一同感謝すると共に、使命感の再認識と授業力向上への刺激となっています。

本校のある先輩の先生は「人は人の目によって磨かれる」と言われます。本当にそのとおりだと思います。皆様方のたくさんの目の中で、子どもも教員も自分自身を見つめ直す機会を得られたことに感謝し、本校教職員の授業力並びに追究力の伸張に大いに期待しているところです。

教師として

日々の忙しさに追われ、いろいろな雑事が私たちに振り回しそうですが、どんなときにもぶれてはいけないうちのがあります。

詩人、高村光太郎さんは、「いくらまわされても 針は 天極を指す」ということばを残しています。自分の信念を方位磁石に例えた詩です。どんなに振り回されても目指した方向を見失わなわず、どんなに忙しくても雑事に追われても流されず、目の前の子どもたちを見失うことなく取り組んでいきたいと思ひます。

学びの質の高まりをめざして ～自己の変容へとつながる「吟味」～

研究主任
須佐 宏



【学びの質の高まりをめざして】

本校は、2007年度より5年間、「学びの質の高まりをめざして」という研究テーマを掲げて研究を進めてまいりました。本年度は、その最終年度と位置づけ、「自己の変容へとつながる『吟味』」というサブテーマのもと、自己との対話をより意識し、三位一体の対話を充実することによって学びの質の高まりをめざしてきました。

6月には、秋田喜代美先生（東京大学大学院）をお招きして、社会科の研究授業を研究協力校の先生方にも公開するという形で研修会を実施しました。協議会には、秋田先生に加え、二宮衆一先生（和歌山大学）、片桐清司先生（元和歌山市立有功東小学校校長）にも入っていただき、パネルディスカッション形式でご意見を伺いました。研修会では、本校の実態として、子どもたちがやわらかくて活発であるが、先生の声が少し大きくなりがちであることを指摘していただきました。また、聴き合う学びによって学びの質を高めていくためには、聴き合う内容の充実が重要であることや作業を伴う活動に入ったときに子どもたちはハイテンションになりがちであるが、子どもたちにとって深い課題であればそうはならないこと、みんなが書いたり読んだりする時間の確保や発問後の待ち時間を意識することによって間合いが早くならないように心がけることの大切さなどを学びました。それらを踏まえて、さらに研究を進め、11月5日に教育研究発表会を開催しました。研究発表会では特に、



- I 学びに向かわせていく焦点化と本時の中での学びの質の高まりを意識した焦点化という2つの焦点化がどのような意図で行われ、そのことによって吟味は生まれたのか。
- II 自己の変容を子どもたちにどのようにして意識させようとしていたのか。

という2つの視点で参観いただき、ご意見を伺いました。秋田先生からは、上記以外の研究の成果として①聴き合う関係ができてきていることと②ジャンプのある課題を設定することができていることの2点を挙げていただきました。また、課題として上記①②の水準を保っていくことは極めて難しいことと、また、よりきめ細かく子どもにどう寄り添っていくかを見極めていくことが必要であることを指摘いただきました。

そして、全体会を通して、協同的な学びは形ではなく、一人一人の子どもの学びとどう向き合うかが大切であり、対象を共に見たり、他者の考えに共に触れたりする関係があつてこそ協同的な学びは成立するという点を改めて確かめることが出来ました。

【来年度に向けて】

これまで積み上げてきた研究の成果を活かしつつ、子どもたち一人一人が主体的な学びを実現していけるように、2012年度は、次のような研究テーマを掲げて研究を進めていくことにしました。

《2012年度研究テーマ》

学びをデザインする子どもたち～3つの対話の充実によって～

子どもがデザインする学びとはどういうことなのか、3つの対話をさらに充実していくために何を行うのか、教師の出番はいつなのか、どこなのかなど、2012年度の研究テーマの詳細は、新年度に発表する本校の学校提案でお伝えします。2012年度の本校の研究にご注目ください。

《秋田喜代美先生の来校決定！》

具体的で大変わかりやすくお話しいただけるということで、参会者の皆様に大変好評である秋田喜代美先生が、来年度も本校の研究に携わってくださり、研究発表会でもご指導いただけることになりました。2012年度の研究発表会は、10月27日（土）開催予定です。ぜひご予約ください。

ならびっこキックベースボール

～ チームの攻め方・守り方を吟味していく学びを目指して ～

体育科
2年A組担任
谷口 佳都司



本年度の体育科は、学びの質を高めるために『仲間とのかかわりから、自己課題に向けて学び続ける子どもを育てる体育学習』をテーマにして取り組んできた。学校教育における体育学習の役割は、運動に親しもうとする姿勢を育てることが大事だと考えている。そのため、子どもたちが対象（運動種目）・他者（仲間）・自己との対話の三位一体の活動の中で運動の特性に迫ることのできる吟味をし、新たな発見や学びを得ることを目指してきた。

本稿では、第2学年の「ならびっこキックベースボール」の実践を紹介する。

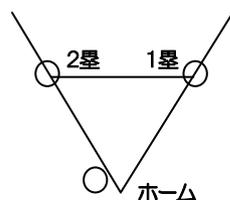
今回のキックベースボールについては、守りの時、キャッチしたところにチームのメンバー全員が集まり、列を作って座って「アウト！」と掛け声を出す方法（ならびっこ）にした。また、攻めについては、チームのメンバー全員が一回ずつ蹴り終わったら攻守交替にした。このようなやり方でゲームを行い、相手チームをできるだけ早くアウトにするためにはどうすれば良いのか。あるいは、どのような蹴り方をすればたくさん得点できるのか等を考え、チームで作戦を立てていくことを楽しむ学習を目指し、この単元を構成した。



【主なルール】(クラスの実態に応じて変更・追加。)

- ・1チーム7～8人 4チーム ・バッターは思い切りボールを蹴る。1塁ベースに向かって走る。次に2塁、ホームベースへと走る。
- ・1つのベースを踏むたびに1点。2周目に入っても良い。「アウト！」とコールされるまで走ることができる。攻撃は一巡したら交代する。
- ・守備側は、1人がボールをキャッチしたら地面から持ち上げる。その人を先頭とし、自分の前の人の肩に手を置きながら電車つながりになる。揃ったら「アウト！」と声を出して座る。
- ・守備側がソーバウンドでキャッチしたらアウト。

【三角型のコート】



◎課題に向かう子どもたち

キックベースボールの経験者が少ないため、単元の一つ初めのゲームでは、正面に飛んできたボールに何とか反応して止めるのがやっとのことであった。少し横に体を移動させたら捕れそうなボールもキャッチできないこともあった。そのため、勢いのあるボールを蹴ると、大量点を取ることができた。第3～5時では、蹴り方の工夫で得点アップするめあてや作戦が多かった。しかし、第6・7時では、守りの工夫に重点を置き、対戦チームから得点されない方法を吟味してプレーする様子が伺えた。ゲームを重ねていくごとに、バウンドに合わせて素早く体を移動してキャッチする



後半のゲームについて話し合う

子どもたちが吟味したこと

- 【攻め方】 ・走塁 ・打順
・ボールの蹴る方向と距離
・ボールを遠くに蹴る技能
・対戦チームの守備隊形の分析
- 【守り方】 ・足の運び方
・キャッチする腕の使い方
・チーム全体の守備隊形
・対戦チームの攻め方の分析
・アウトにする列の並び方



早く体を移動してキャッチする子が増えてきた。また、蹴る子によって、チーム全体の守備隊形、内野と外野の人数の変更などを工夫している様子が見られた。

◎実践を振り返って

ボールを強く蹴ることができない子、ボールをしっかり捕ることができない子の中には、技能を少ししか習得できていなかった子もいた。チームでの練習を短時間で効率よくできるように、各チームで事前にしっかり練習内容を決めて行うように、教師が働きかけた方が良かったと思った。ベースを踏むタイミングがセーフかアウトか、蹴ったボールがフェアかファールかの判定でもめることが多かったので、教師が常時見やすい位置に立ち、即座に判断して決めることが必要だと感じた。低学年の段階ではなかなか自分の考えを仲間に伝えることが難しいので、個人学習カードに、「今日の学習はどうだったか」「困ったことはどんなことか」「今日のファインプレー賞（だれ・どんなこと）」を毎時間書き込ませたことで、子どもの学習意欲や子ども同士の信頼関係が高まり、温かい雰囲気作りができた。

ハ調の音階による16小節の旋律づくり
 《5年生の実践から》
 ～音楽を味わって聴き、思いや意図をもって
 表現する子どもを育てるために～

江田 司
 (音楽専科)



◆いろいろある「反復」のかたち

ひとくちに旋律の反復と言っても、まったく同じものをくり返す「模倣」、モチーフやフレーズ単位で上下に平行移動する「同型反復」、同じ音を連打する「同音反復」などがある。これらは、子どもたちに身近な曲『ちゅーりっぷ』『ちょうちょう』『ロンドンばし』『ひのまる』などで確かめさせることができる。ここでは旋律の「おわらせ方」を学習したあと、第1小節目と第2小節目を「同型/同音反復」でつなぎ旋律づくりを試みた。

(右譜例No.1)

1段目と2段目は最初の2小節を同じにして、1段目の最後は「続く感じ(半終止)」、2段目の最後は「終わる感じ(終止)」とした。

3段目を対照的につくらせ、4段目は2段目とまったく同じ旋律にして、曲全体にまとまりが生まれるようにした。第1小節目をつくる際には、第3拍目を「ソ」の音に指定して誰もが作りやすいように工夫した。

◆旋律づくりで困ること

音符や休符や記号など「楽譜を書く」ことには「慣れ」が必要である。

本実践では、第1学年からの積み上げとしてどの子どもも、①四分音符や四分休符が書ける。②ト音記号が書ける。③3音程度の旋律づくりができる。の3点である。

実際に7音の音階を使ってつくらせ始めると(楽器を使わせるわけだが)子どもたちの傾向として音を頻繁に上下進行させてしまう。本来、美しい旋律は近い音へ動くのが原則である。また、「シ」は「ド」へ行こうする性質(導音)がある。これを忘れると、旋律としてふわふわした感じになってしまう。

◆基本をクリアしたら自由につくる!

譜例のNo.2は、第1小節目を自由に

したもの。No.3は同型反復や同音反復を自由に使ってよい(使わなくてもよい)としたもの。いずれにも工夫の跡が見られるが、とくにNo.3では、リズムの反復と同音の反復を見事に組み合わせ「うさぎがびよんびよん～」のように自分がつくったものへの共感や曲想も的確に表せている。学級の子どもたちがそれぞれに工夫してつくった曲をお互いに聴き合ったり演奏し合ったりする中で、旋律づくりの楽しさを感じ取らせることができた。一方、題材「詩と音楽を味わおう」の鑑賞教材『待ちぼうけ』では、旋律に隠された反復(模倣)の効果や、くり返される休符が言葉のまとまりをつくり出していること、旋律が半終止となって中国風な旋律となっていることなどにもすぐに気付き、音楽を味わって聴いていた。

反復を使った児童作品例(No.1～No.3/5年生T児)

No.1

ひとことメモ:これが一番最初につくった基本の曲です。楽しい場所にて、ルンルンみたいな気持ちでつくりました。

No.2

ひとことメモ:基本的に私は暗い曲があまり好きではないので明るい感じの曲です。

No.3

ひとことメモ:楽しい気持ちでかいた。例えば、うさぎがびよんびよんととんでいるような少しいそがしい曲にしてみた。

単元を貫く言語活動の設定により、 主体的な読みを促す

国語科
5年B組担任
湯浅 明菜



単元を貫く言語活動の設定について、5年生『百年後のふるさとを守る』と『大造じいさんとガン』の実践を紹介する。

ブックトークで目指せ！伝記の伝道師 『百年後のふるさとを守る』

学習まんが以外の伝記をあまり読んだことのない子どもたちが興味をもって読むための手立てとして、伝記を紹介する活動を考えた。

単元を貫く課題との出会い ～学習の見通しをもつ～

「伝記」について触れ、ある歴史上の人物を簡単に紹介した。その後、その伝記文を配布すると、喜んで読み始めた。伝記に興味をもち始めたところで「自分の好きな伝記のブックトークをしよう」と課題が決まった。紹介相手を考える際、できるだけ早く伝記に出合っほしいが1, 2年生には難しいという話になり、3年生を対象に決めた。

朗読でせまろう 『大造じいさんとガン』

人物の言動、情景描写などに着目し、大造じいさんの残雪に対する思いの変容を読み深める姿を目指し、朗読の工夫を考える活動を設定した。

教材を読む ～なぜその作品を読むのかを意識して～

相手に読んでみたいと思わせるには、その人物の魅力にひきつけることが大切である。ひきつけられるような紹介文の書き方を学ぶために、まず教科書の濱口儀兵衛の伝記を読み、心に残ったことを中心にして紹介文を書いた。

朗読の工夫を意識することで、自然と本文に根拠を求めることにつながる。読む強さ、速さ、間など読み方について学ぶとともに、人物の言動や場面の様子、情景描写に着目することで、大造じいさんの残雪に対する心情の変化を考えた。

小グループ活動での学び合い

各自、図書室で伝記を1冊選び、その紹介文を書き、小グループで読み合った。その人物の魅力が伝わるかという視点から表現や構成について良いところを伝え合った。そこからさらに自分の文章を改善してブックトークに臨んだ。

全体学習では個人が読む機会は少ない。そこで、小グループ学習の必然性が生まれた。何度も声に出して読み、自分の考えた朗読の工夫とその理由について話し合った。また、ICレコーダーで読みを録音し、授業後の読みと比べた。

どうなったかを想像させる書き方で
興味もてるね

私もこんな表現を
つけ足そう



最後の力を振り絞っているように、
ゆっくり読むよ

その読み方がいいね

僕は強く読みたいな



子ども自身が、単元を貫いた課題意識をもてるようにすることで、
主体的に読もうとする姿につなげることができた。

- 伝記をあまり読んだことのない5年生が進んで読書をするために、下学年にブックトークをするというめあてをもつことは有効であった。
- 伝記のブックトークをした後、感想文をもらったり、図書室で3年生が伝記を借りる場面に出会ったりして、5年生の子どもたちは自分たちの学習の成果を感じることができた。

- 朗読の工夫を意識することで、自然と本文に根拠を求めようとする姿につながった。さらに録音することで、本文を読み深めることが朗読につながったことを実感していた。
- 友だちとの読み方の違いに気づき、作品への考えを伝え合っ朗読を高め合うという共通認識のもと、話し合いや朗読への意欲が高まった。

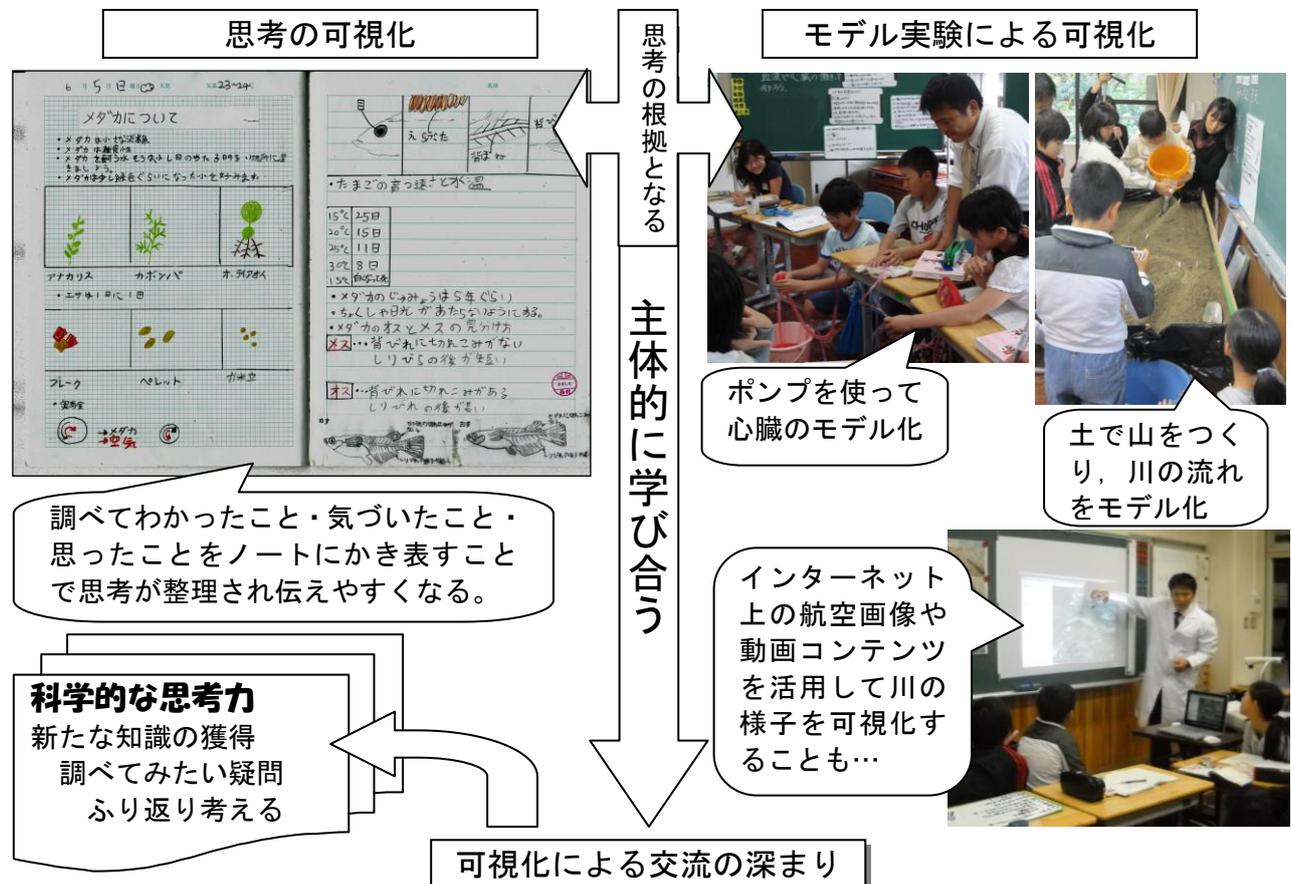
可視化することにより交流する

複式理科
5・6F担任
西村 文成



直接指導と間接指導のある複式学級において、子ども達が主体となって学習を進めることはとても重要です。理科の学習において課題を自分達で解決していく交流が活発になるために「可視化する」をキーワードとして取り組みました。

「可視化」とは、「見えるようにする」ということです。具体的には「思考の可視化」と「モデル実験による可視化」の二つを中心に考えました。「思考の可視化」とは、子どもの考えや思いを絵や図、文に表したものです。個人思考を何らかの形でかき表すことで他者に伝えやすくする効果があります。また「モデル実験による可視化」とは、実際に実験や観察することが困難な自然の事象をモデル化して実験することです。写真や図で見るだけでは、立体的に捉えられなかったり、動的に捉えられなかったりしてイメージが広がりにくいものです。そんなときに自然の事象をモデル化することで、子ども達のイメージの広がりを助けて、交流に役立てます。



思考を可視化することで、かなり交流の場が生まれました。自分の考えをあらかじめ、かき表してから話し合いや実験・観察などの交流活動を行うことで興味・関心が高まっているようです。また、友達のノートを見せてもらうのはすごく参考になっているようです。子ども達のノートが色使いやきれいにまとめられるようになってきたことから効果があることが伺えました。また、モデル化実験による可視化においても、関心や意欲が高まり発言数が増えたえり、ノートへの記録が充実したりしていたことからその効果が捉えます。

可視化による交流の深まりは、新たな知識の獲得や新たな疑問を生み、考える土台を構築してくれているようです。子ども達が根拠をもって思考するという科学的思考力を育ててくれるのに「可視化」は一役買ってくれているようであります。そして、複式という主体性を求められる教育の場においても有効であると考えています。

「ひと・もの・こと」との出会いが大切

～無農薬・有機野菜栽培から～

CHANGE
3年A組担任
矢出 大介

◆魅力あるひととの出会い◆

総合的な学習の時間を通して、社会でたくましく育つ子どもになってほしいと願っている。そのためにも、魅力あるひとに出会うことが大切である。魅力あるひとに出会うことで、「自分もこうなりたい。」「自分ももっとがんばりたい。」「大人になったらこんなことをしてみたい。」など、社会に出ていくことに希望をもつことができるようになる。今年度は、無農薬・有機栽培こだわりの野菜を育てた。そこで、JASの有機野菜の認定を受けている農家のFさんに関わってもらい、自分たちの畑を見てもらったり、質問をしたりアドバイスをもらった。また、Fさんの畑を見学し、みんな安心して食べてほしいことや、未来ある子どもたちのために美しい自然を残していきたいという思いなどを聞くことができた。

子どもたちとFさんに出会うまでは、自分たちなりに愛情とこだわりをもって育ててきたつもりであったが、Fさんとの出会い、畑を見たり話を聴く中で、自分たちの育て方が不十分だったと感じることができた。そして、「もっとこだわりたい。」「もっと愛情をもって育てたい。」「Fさんのように育てたい。」と思うことができた。

直接出会うことにより地域の魅力あるひとは、学びを高めてくれる素晴らしい指導者になってくれる。素直な出会いが、人々の願いやこだわりを知るきっかけとなり、その思いを伝えたい、近づきたいと子どもの追求する気持ちが高まり、学び合いが高まる。



◆出会う前に大切なこと◆

上記でも示したように子どもにとって魅力あるひととの出会いは、今後の生活に大きな影響を及ぼしてくれる。より効果的にするには、指導者になってもらえるようなひととの最初の出会いが、とても重要だと考える。

先生が「一方的にこの人と会いましょう。」と言うのではなく、何か問題が起ころったり、子どもたちだけで解決が難しい壁にぶち当たったりした時に、魅力的なひとに出会うチャンスになる。疑問や問題を解決するためには、どうすればいいのかわからない、子どもたちの中から、「このひとに聞きたい。」「このような人に聞きたい。」と声が上がってきてから、そのひとに出会わせることが大切である。今回は、自分たちが無農薬こだわって大切に育ててきた野菜が害虫に葉っぱを食われてしまい、どうすればと悩んでいた時に、一人の子どもが農家の人に聞きたいということから出会うことになった。

また、いきなり出会うのではなく、事前にもみなでどのようなひと（年齢・性別・性格・見た目など）かを話し合ったり、想像して絵を描くことで、会うことが待ち遠しくなる。そして、出会った時の、印象も強く心に残る。初対面の状況でも、子どもたちなりに何か思いをもって接することができる。

「ひと」だけでなく、「もの・こと」においても同様のことが言える。教師が一方的に出会わせるのではなく、子どもたちの思いを大切に合わせることが大切である。教師は、子どものひとり学習をしているノートや発言からしっかり子どもをみとり、事前にも準備しておかなくてはならない。



◆地域教材を活かす◆

子どもが本気になることで学んでいくためには、子どもが何を求めているのかをみとることがとても大切になってくると考える。例えば、中学年の子どもにとって地域教材であることが、大きな要因の一つである。地域教材は、まさに生活に密着することができる可能性があるからである。

「ひと・もの・こと」と直接出会うことが容易である。インターネットや本だけの知識ではなく、実際に自分の目で見たり、話を聞いたり、心で感じることもできる。

野菜作りでは、学校の敷地内に地域の人が野菜を育てていたり、自分たちが住んでいる周りにも野菜畑がある子どもがほとんどであった。そのため、自分たちが野菜を育てていく中で、問題解決のために畑を観察したり、実際に農家の人に話を聴くことができた。「まんまもん」にふれながら学ぶことができるのも、地域教材の魅力の一つだと考える。

◆「ひと・もの・こと」との出会い◆

無農薬・有機栽培こだわって子どもたちが野菜を育て、課題解決をしている姿を見ていて、子どもが本気で取り組むためには「ひと・もの・こと」との素直な出会いが大切だと実感した。これからもこれらの出会いがきっかけに子どもを本気させるのが実践と研究を重ねていきたい。

聞き合う子どもたちがつくる協同的な学び

～「書くこと」で深まる対象・自己との対話・
「聞く視点」をもつことで深める自己・他者との対話～

国語部

1年A組担任

中田 郁子



子どもたちが、説明的文章を読み解く学習において、「自分ならどう書くか」という視点で読むことができるように光村図書の「じどう車くらべ」を用いて単元を組んだ。

「自分なら」という視点が、主体的な学びにつながると考えたからだ。子どもたちが、書くことを通して対象・自己と対話し、ペアトーク・全体での交流を通して、自己の変容を意識できるような授業作りを目指してきた。

以下は、これらを実現させるために講じた手立てである。

1. 「聞く視点」をもって

学びの質は、子どもたちが主体となって行う意見交流の中で高まると考えた。だからこそ、ただ「友達の考えをよく聞きましょう。」というのではなく、子どもたちが、友だちの考えを「聞く視点」をもって聞けるように取り組んだ。

それは、自分たちのペアトークに名前をつけることである。話し合った内容に名前をつけるためには、自分の考えと友だちの考えが、同じなのか、または、異なるのかを考えながら聞かなければならない。二人が同じ内容を話していれば「にこにこペア」、二人が異なる主張をすれば「もりもりペア」、また、二人で新しい発見をすることができれば「きらきらペア」とした。



ペアトークをする様子



ペアトークの名前と話し合ったことを発表する様子



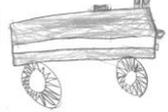
2. 単元を貫いた言語活動

自分たちで「1Aはたらく じどう車ずかん」をつくることを学習のゴールとした。1次では、教材文から「しごと」と「つくり」を読み取り、2次では、じどう車ずかんを書いた。

以下は子どもたちが書いた「じどう車ずかん」である。

こ	ほ	さ	み	い	で	う	キ
ろ	て	ま	ん	た	て	ん	ヤ
か	る	す	な	い	い	て	ン
み	で	と	ま	ん	セ		
あ	た	そ	し	こ	す	セ	ン
リ	い	の	ろ	き	ク		
ま	に	た	く	も	ろ	の	カ
す	ね	ぬ	じ	あ	う	い	
る	に	も	る	ち	え	は	
と	こ	し	が				

し	あ	な	く	め	を	る	み
ご	か	の	ち	に	し	人	や
と	け	に	き	の	て	を	か
を	て	の	て	か	い	た	わ
し	た	つ	お	ら	ま	す	で
て	す	て	ふ	か	す	け	お
い	け	え	ぬ	う	る	車	
ま	に	ん	み	か	そ	し	れ
す	い	し	た	ぶ	の	ご	て
す	く	ん	い	ら	た	し	い



か	て	す	る	い	ホ	火	か
ら	な	か	ま	く	い	ろ	ホ
く	ち	だ	い	す	リ	ス	の
ん	る	け	こ	に	火	が	フ
で	か	ど	ち	そ	は	を	て
き	ら	る	の	ル	け	て	は
ま	う	ぶ	く	水	は	せ	し
す	み	ぐ	ら	は	い	ん	ま
の	だ	ら	い	お	ハ	す	水
川	い	て	い	て	び	で	ス

今後の課題

教材文から「しごと」と「つくり」を読み取っていく活動にもっと必然性をもたせなければならなかった。子どもたちの学習意欲を喚起するように「教科書には、2つのことが書かれています。それが、何か分かるかな。分かったら、ワークシートに書いておこう。書いたことを発表し合えば、きっとみんなも『さすが図鑑』をつくれるよ。」と言葉をかけておけばよかった。そうすれば、「教科書は、どんなに書いているのかな。」と、子どもたちが、もっと言葉と言葉、文と文のつながりを意識して読めたろう。

今後は、子どもたちに確かな力をつけることができるように教材と向き合い、単元をつくっていきたい。

From Editors

『らいぶ・創りえいた一』も11年目を迎えました。

「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。

本校ホームページにはカラー版を掲載しています。

ご意見・ご感想をお寄せ下さいれば幸いです。

編集委員：三上，松尾，中田，矢出，藤原

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp